

日本の 伝統工芸と 出会う旅

中田 英寿

元日本代表サッカー選手

南から北まで、
心ひかれる日本の文化との出会いを求めて
旅をつづける中田英寿さんに、
漆をはじめとする伝統工芸についてお聴きしました。

聞き手・田端 雅進(東北支所 産学官民連携推進調整監)



漆器に装飾を施す「加飾」の指導を受ける中田さん。^{ちんきん}「沈金」は、金粉を用いる時絵技法のひとつで、漆の塗膜に刃物で溝を刻むようにして図案を描き、そこに金粉を埋めこむ。

漆をめぐる状況と漆サミット

「漆器」と聞いて、みなさんはどのようなイメージをお持ちでしょうか？

現代では、多くの人が「漆器」として使っている器のほとんどは、漆以外のカシュー^{*}や合成樹脂を塗った「合成漆器」のことが多いのではないだろうか。

しかし本来の「漆器」とは、塗料として漆を塗ったものを指し、合成漆器とはまったく異なるものです。生活様式の変化に伴い、こうした漆器などの日本の伝統文化への理解がしだいに薄れてきているようです。

そこで2010年に、森林総合研究所や大学、漆生産者や行政等の有志が集まって漆サミット実行委員会を組織し、「漆サミット」を立ち上げました。漆に関わるすべての人々が一堂に会し、情報交換や相互理解、協働作業を通して漆産業における技術・文化の継承と発展を図ることを目的としています。この漆サミットは、これまで明治大学をはじめ、漆に関わる産地である岩手県二戸市浄法寺町や、漆器の産地である石川県輪島市などで開催され、2019年で11回目を迎えました。

漆サミットを開催する中で、日本の漆文化を継承し、さらに発展させるためには、漆に関わる人びとのネットワークの形成や、諸機関との連携・強化の必要性が強く望まれるようになりました。それを受けて、漆サミットを開催する主体として、2016年3月に「日



京都府福知山市でのウルシ林の見学会(左)と、鎌倉彫の体験ワークショップ(右)



漆サミット 2019 in 弘前

これからの国宝・重要文化財の保存・修復
—国産漆の特性を理解し国産漆の安定供給を促す—
令和元年 11月15日(金)～17日(日)

弘前市立観光館【入場無料】
JR「弘前駅」からバス 15分

11月15日(金)	観光館多目的ホール(鑑賞会は弘前市内)
10:00～10:15	開会式
10:20～11:20	基調講演「国産漆の特性を活かした国宝・重要文化財の保存・修復」 講師：重要無形文化財「蒔絵」保持者(人間国宝) 室瀬和光氏
11:20～12:20	基調講演「弘前漆の増産の系譜と挑戦」 講師：弘前市文化財審議委員長 稲井敏雄氏
12:50～13:50	ポスター発表
14:00～17:00	講演・パネルディスカッション「これからの国産漆増産に向けて」
18:00～20:00	懇親会【参加費は事前申し込みが必要ですが、有料】
11月16日(土)	観光館多目的ホール
10:00～12:00	講演会「施文の漆製品とウルシの利用」
12:50～13:50	ポスター発表
14:00～17:00	講演会「地方産生を目的とした国産漆の普及啓発の取組と課題」
11月17日(日)	重要文化財「神祇為経堂」・足利義満館
8:00～14:00	重要文化財「神祇為経堂」・足利義満館見学会【参加費500円・有料】

主催：日本漆アカデミー
共催：(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所、弘前市教育委員会
後援：林野庁、(地協)青森県産業技術センター、NPO法人 竜木昌の会

【問い合わせ先及び懇親会と見学会の申し込み先】
(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所東北支所 田嶋雅道 ☎019-648-3950
日本漆アカデミー運営委員会 e-mail: info@urushisummit.jp
日本漆アカデミーHP http://urushisummit.jp/

本事業は文化庁「ふるさと文化財の森システム推進事業」普及啓発事業の一環として実施するものです

漆サミット2019ポスター

***Key Words** カシュー(カシューノキ、カシューナッツ)
ブラジル原産のウルシ科の常緑高木。果実の仁(種子の中にある核の部分。胚と胚乳とからなる)は、食用のカシューナッツとして知られる。果実の殻にふくまれる油性の液には、漆に似た成分がふくまれており、硬質で光沢のある被膜をつくることからカシュー塗料として利用されてきた。さらに化学溶媒と混合させて、代用漆塗料として使われている。



中田 英寿 (なかた ひでとし)

1977年生まれ。山梨県立韮崎高校卒業後、Jリーグ ベルマーレ平塚(現湘南ベルマーレ)に入団。1996年アトランタオリンピックに出場。2006年ドイツW杯のブラジル戦を最後に29歳で現役を引退。引退後は世界を旅し、2009年より全国47都道府県をめぐる旅をスタート。「工芸」だけでなく、300蔵近くの蔵元をめぐるなど、「食・農」「日本酒」をキーワードにいまも、旅をつづけている。

漆サミット●INTERVIEW

日本のことをよく知らない自分に気づいた。 それが、日本全国への旅のはじまりだった。

こうして漆をめぐる状況の中で、より多くの方に漆というものを改めてお伝えしたいと考えました。今号では、「漆とウルシ」と題した特集記事において、漆の基礎的な解説をするとともに、元・日本代表サッカー選手で、現在は日本の伝統文化に関心の高い中田英寿さんにインタビューを行いました。

中田さんは、JリーグやイタリアセリエAのペルージャ(世界の名門トップチーム)、日本代表選手としてサッカーワールドカップやオリンピックで活躍した後、2006年に現役を引退。引退後は、世界を旅しながら見聞きた体験から、いまこの地球上で起きている

工芸との出会い

本漆アカデミー」を発足させました。このアカデミーを母体として、これまで国産漆の特性や評価、漆掻き技術などに関する講演会、鎌倉彫や津軽塗などを体験するワークショップ、ウルシ植栽地や国宝・重要文化財の保存・修復に関わる見学会などを企画主催してきました。これらの活動を通して、漆に関わる知識の普及啓発や相互交流を担うことが、これから期待されています。

昨年の青森県弘前市の漆サミットでも、森林総合研究所が中心となり、ウルシ林の資源造成、育成および管理などに関わる研究成果の普及を行いました。国宝・重要文化財の保存・修復には、原則100%国産漆を使うように、生産者、漆精製者、消費者をつなぐ橋渡しを行っています。

さまざまな問題を身近にできることから解決しようと、2008年に「TAKE ACTION! 2008+1」キャンペーンを立ち上げます。さらに翌年からは、全国47都道府県をめぐる旅をスタートさせました*。旅を始めたきっかけについて中田さんはつぎのように語っています。

「海外でまず聞かれるのがサッカーのこと。そして、つぎに聞かれるのが、日本についてでした。いかに自分が日本について知らないかということに気づかされ、それを知るために、47都道府県をまわってみようと思ったんです」

中田さんは、旅する中で工芸に興味を持たれ、「漆」とも出会いました。

今回の取材の直前にも、中田さんは茨城県の大子町で、漆掻きを体験してきたそうです。秋も終わりのことで、この時期、漆液は粘度が高いのが特徴です。これまで、日本の漆生産の最大産地である岩手県三戸市浄法寺町でも漆掻きの体験をしたという中田さんに、漆の話を中心として、伝統工芸についてお話をうかがいました。

若者に魅力的に伝えるということ

——伝統工芸との最初の出会いは？

「旅をスタートしたのは沖縄でした。沖縄にも漆器がありますけれど、最初の出会いは漆



* Key Words REVALUE NIPPON PROJECT

2009年の春からはじまった中田英寿さんの全国の工芸家や農家、酒蔵などをめぐる旅を受けて、TAKE ACTION FOUNDATIONがはじめたプロジェクト。より多くの人に「知ってもらう」きっかけをつくることで、日本の伝統文化の継承・発展を促すことを目的とした。2016年にパナソニック汐留ミュージアムで完成した作品の展覧会が行われた。写真は、同展覧会の図録『REVALUE NIPPON PROJECT 中田英寿が出会った日本工芸』(マガジンハウス)



くろし らでん
黒漆と螺鈿に真珠をあしらったバングル

工芸家:山村慎哉、コラボレーター:テレジータ・
フェルナンデス、ヴァネッサ・フェルナンデス、
アドバイザー:中田英寿

REVALUE NIPPON PROJECTより



漆塗りのバングルの箱

巻頭◎対談

いまの若い人がよさを感じるものをつくって、
それを、きちんと伝える工夫が必要なんだと思う。

器ではなく、焼き物か織物だったかと思ひます。僕は、琉球漆器の発色のいいぬけたあの色は大好きです。」

——いま、伝統的工芸品の生産額や従事者数などは右肩下がりでへってきています。漆屋さんなど漆で生計を立てている人たちの生業が成立しにくくなってきた状況があります*。

「漆器というのが、漆を使うことが大事なのか、器を作ることが大事なのか、よくわからなくなってきたいるんじゃないでしょうか。いまの生活に合う器がちゃんと作られていて、いまの人たちがいいなと思うデザインであれば、漆器でも売れると思うんですよ。

いまの人たちは『漆器だから買う』というわけじゃなくて、その器が漆器なのか、人工塗料なのかということをあまり気にしていないんだと思います。だから、『素材がなにになだから売れない』ということではないと思いますね。」

——いまの人は漆に興味がないということでしょうか？

「興味がないのではなくて、みんな知らないだけだと思います。素材によって長所や適した使い方があるということを知れば、興味を持つ人がふえる可能性は十分にあって、伝統産業が衰退しているのではなく、使い方や情報を知っている人がへっているだけだと思います。現代の若者のライフスタイルに合わせて魅力的に伝えることが大事です。」



彫られた溝に生漆を塗りこみ、金粉を蒔いて図案を浮かせ上げる。

たとえば、若者をターゲットとするならば売り場所をいわゆる伝統工芸の場所から、ファッションのお店に変えるだけで、興味を持つ可能性がすごく高まると思います。ターゲットに合わせて適した伝え方をすること、ということを考えないといけない。

ただ『若者は興味がない』とは僕は思わないですね。伝わらないのだと思います。」

おもしろければ、人に伝わる

——伝統工芸が模索する道として、新しい表現やアピールの場の創出、現代アートとのコラボにひとつの道をみつけることができるでしょうか？

中田英寿の本

に・ほ・ん・も・の
中田英寿

『に・ほ・ん・も・の』(KADOKAWA)

沖縄から北海道まで、中田さんが旅をつづける中で出会った数知れない「わざ」「ごちそう」「おもてなし」「にほんしゅ」「おみやげ」の中から、選りすぐりの人・モノを紹介した本。

* Key Words 国産漆の現状

ウルシの原産地は中国で、漆の文化圏は、日本、中国、東南アジアなどに広がっている。現在、漆芸に使われる漆の98%は、輸入漆となっている。文化庁の調査試算では、国宝・重要文化財の保存・修復のために年間平均2.2tの漆が必要とされているが、2017年度の国産漆の生産量は1.2tにとどまっている。(くわしくは▶P.8～13)



木皿

工芸家:佐竹康宏、コラボレーター:田村菜穂、アドバイザー:伊東豊雄
REVALUE NIPPON PROJECTより



中田さんの主催するイベントでは、
漆塗の工程を展示している。

「工芸もアートも、それこそ建築やデザインなんかも、現代では垣根がなくなっている。ボーダーがなくなっている時代だと思っています。そうした意味では、伝統工芸にとっても非常にいいチャンスなんじゃないでしょうか。アートフェアでも工芸的な作品がだいぶ出てくるようになってきていて、そうした環境の広がり、解釈の広がりができているように思います。そのことを個々の伝統工芸家の人たちがどう思うか。『嫌だ』と思う人たちがあれば、『ああ、それはいいんじゃない』という人たちもいるでしょう。」

いろいろな考えがあるのは当たり前だし、正解はないと思います。ただ、自分を、そして周りを変えられるのは結局、工芸家自身なのだろうと思います。

いわゆる工芸関係のギャラリーやデパートだけで見せようとすると、どこへ行ってもある程度、伝統工芸に親しんだ年配の方たちが多い。それを新しい取り組みの仕方をしたり、新しい場所で見せたりすると、お客さんの層も広がってくる。

これまで自分のプロジェクトでも、何か行うとき常に大切にしてきたのは、自分が楽しいと思うことをやること。どんなことでもおもしろければ参加する人も増え、結果、より多くの人に伝わっていく。だから、いかに楽しくできるか、それを徹底的に考え工夫していくことは、新たな可能性を広げるチャンスになるんだと思います。」

———ありがとうございます。



聞き手：田端 雅進（たばた まさのぶ）

（国研）森林研究・整備機構 森林総合研究所 東北支所 産学官民連携推進調整監。専門は森林保護学。昆虫と菌類の共生および病気の発生メカニズム、近年は素材としての漆に魅せられ、おもに漆生成メカニズムを研究中。また、漆の良さを広めるための漆サミットを毎年開催、日本漆アカデミー会長を務める。共著に『生活工芸双書 漆1』（室瀬和美・田端雅進監修 農文協）